

夫婦パスタ日記

第1回 『ウインナーとキャベツのペペロンチーノ』

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

長沢 聡志 (30) グラフィックデザイナー
長沢 唯 (30) 聡志の妻、パティシエ

権藤 浩一 (60) 洋菓子店『ヴェール』オーナー
立花 圭吾 (33) 印刷会社『京町印刷』営業部社員
寺川 千晴 (25) スーパー『ユーミー』レジ担当

洋菓子店『ヴェール』の従業員たち

洋菓子店『ヴェール』の客たち

区役所の職員

スーパー『ユーミー』の店員

スーパー『ユーミー』の客たち

聡志と唯の同級生たち

1 マンション・全景（朝）

神奈川県各市街地の一角――。

2 同・長沢家・玄関くDK

二DKの造り。

出かける支度をした長沢唯（30）が、靴を履いている。

唯「（リビングに振り返って）行ってきます。

今日は少し遅くなるかも」

リビングのテーブルで、朝食を食べている長沢聡志（38）が振り向いて、

聡志「はいはい。行ってらっしゃい」

唯、ドアを開けて出ていく。

聡志、テーブルの上に置いてある空になった白い皿とコップを片付けて、流し台に運ぶと、水を出して食器類を水に濡らす。

3 地下鉄・改札口前

唯が、定期券をかざして中へ入ってい

く。

4 マンション・長沢家・DK

朝食を食べている聡志。

5 洋菓子店『ヴェール』・事務室

駅近くにあるレンガ造りの洋菓子店。

唯が出勤してくる——既に先輩パティシエたちが出勤している。

唯「おはようございます」

パティシエたち「おはようございます」

6 マンション・長沢家・DK

台所で食器洗いをしている聡志——水と洗剤がはねて、聡志の大きな黒縁メガネに飛び散る。

聡志「うわッ……」

聡志、最後の食器洗いを終わると、手を拭き、メガネ拭きでメガネについた水と洗剤を拭き取る。

と、壁に立てかけられた鳩時計が鳴る
——聡志、綺麗になったメガネをつけて時計を見る。

鳩時計は、朝の九時に針を指している。

聡志「（手を打って）よしッ」

タイトル——夫婦パスタ日記

第1話『ウインナーとキャベツのペペ
ロンチーノ』

7 マンション・長沢家・廊下く聡志の仕事
部屋

聡志が廊下を歩き、一室のドアを開けて入る。

デスクトップのパソコン、小型の複合機、様々な質感の紙をまとめたサンプルが置いてある——聡志の仕事部屋である。

聡志（N）「ここが、今の僕の仕事部屋である。大手広告代理店のグラフィックデザイナー

ナーから独立して、早いもので一年半が経過した。都心から三十分ほどの郊外にある二DKのマンションに引っ越したのは前職の有給休暇消化中の頃で、一室を自分の仕事部屋、もう一つの部屋は夫婦の寝室にしよう、引っ越し先を決める段階で、既に妻の唯と話し合っていた」

8 高校・校門前（回想）

卒業式を終えて、歩いている高校時代の聡志と唯。

聡志「なあ、唯」

唯「何？」

聡志「こんなこと、卒業式で言うことじゃないかもしれないけどさ」

唯「うん」

聡志「三十路までお互い独身だったら結婚しような」

唯「（苦笑して）何を言い出すかと思ったら」

聡志「……」

唯「良いよ。まあ、うちの家族も賛成してくれると思うけど」

9 マンション・長沢家・聡志の仕事部屋

(現在)

パソコンで仕事をしている聡志。

聡志(N)「お互い専門学校に進学はしたものの地元に残り、僕はグラフィックデザインー、唯はパティシエとして働き、仕事を生きがいにしていたら、いつの間にか三十歳直前になっていた」

10 結婚式場・ロビー(回想)

聡志(N)「あれは、中学時代の同級生の結婚式に出席した二年前のこと……」

それぞれ招待客として正装している聡志と唯が話している。

唯「あの言葉、覚えてる？ ほら、高校の卒業式の帰り」

聡志「ああ、覚えてるよ」

唯「結婚を前提に、私たち付き合わない？」

聡志「……こつちが先に言おうと思ったのになあ」

唯「あ……ごめん」

11 マンション・長沢家・DK（現在）

棚の上に飾られている写真立て——結婚式の時に撮影したタキシード姿の聡志とウエディングドレス姿の唯の写真。

聡志（N）「幼馴染ということが重なり、特に交際したという感覚もなく、その結婚式からちようど一年後に結婚式を挙げた。保育園から一緒だっただけに、周囲の人間は僕たちの交際や結婚に大きく驚く様子はないかった」

12 同・同・聡志の仕事部屋

複合機から、印刷されたスーパーマーケットのチラシのデザイン案が出てくる——それを手にする聡志。

聡志（N）「仕事を辞めて個人事業をスタートさせたのは、結婚からわずか半年の時だった」

13 同・同・DK（回想）

テーブルに向き合って話している聡志と唯。

聡志「これから家のことは、俺がやるから」
唯「無理しない程度にね。家にいるって言うても、聡志だって仕事していくわけなんだし。もし仕事が忙しくて余裕がない時は、私だってやるから」

14 同・同・聡志の仕事部屋（現在）

チラシのデザイン案に、赤ペンでチェックを入れていく聡志。

聡志（N）「個人事業を始めることは、実家の両親にも唯の家族にも心配されたが、何とかこの一年半、続けることができてい

15 洋菓子店『ヴェール』・店内

客が数人来ており、店員が対応している。

ガラスケースに飾られている生洋菓子や、テーブルに並べられた焼き菓子など。

奥の厨房で、唯、オーナー・権藤浩一（ごう）、他パティシエたちが洋菓子造りをしている。

唯の胸元には、『製造主任 長沢唯』の名札。

唯（N）「高校卒業後に、製菓専門学校に二年通い、学校に来ていた求人票を見て応募したのが、今の勤め先である洋菓子店『ヴェール』である。気がつけば今年で勤続十三年だ。ちなみにパティシエになることは、小学校からの夢で、もちろん聡志も知っていた」

16 区役所・窓口（回想）

婚姻届を出す聡志と唯——対応する職員。

職員「おめでとうございます」

一礼する聡志と唯。

17 同・表（回想）

聡志と唯が出てくる。

唯「まさか、あの言葉が本当に実現するとは思わなかった」

聡志「え？」

唯「私、本気にしてたんだよ。だからこの歳まで無理に恋愛しようとはしなかったんだから」

聡志「唯……」

唯、聡志の手を握って、

唯「行こッ」

歩いていく聡志と唯。

18 洋菓子店『ヴェール』・店内（現在）

それぞれ菓子作りをしている唯、浩一、

他パティシエたち。

唯（N）「今思えば、聡志と結婚することは運命だったのかもしれない」

浩一「（唯に）長沢。ロールケーキの生地、あと何分で焼きあがる」

唯、振り返ると、壁側に備え付けられた業務用の大きなオーブンレンジに表
示されたデジタルタイマーを見る。

唯「あと六分です」

浩一「（生クリームを作りながら）よし、じやあそれが終わったらショコラケーキやるぞ。すぐできるように準備しといてくれ」

一同「はいッ」

唯（N）「今、うちの店では、バレンタインを直前に控えていることもあり、チョコレートを使ったスイーツが特に売れている。近隣にある大手百貨店『山越屋』に、クッキーやチョコレートなど日持ちするお菓子の詰め合わせを卸していることも重なり、一年の中で一番の繁忙期である。仕事で疲

れた時の私の一番のエネルギーになるのが、
聡志が作るパスタだった」

19 マンション・長沢家・玄関

カジュアルなビジネススタイルの聡志
が出てくると、鍵をしめる。

唯（N）「どこで料理の技術を覚えたのか知
らないが、グラフィックデザイナーよりも
パスタ店を開業したほうが良いのではと思
うほど、聡志の腕は確かなものだった。毎
日ではないものの、高頻度で夕飯にパスタ
を食べることがあり、これがまた美味しい。
デザインの仕事をしているだけあり、ただ
作るだけではなく、使用する材料や盛り付
けにも聡志は意識を向けているらしい」

20 洋菓子店『ヴェール』・店内

オーブンレンジから、焼きあがったロ
ールケーキの生地を取り出す唯。

唯（M）「絶対、今日はパスタが食べたい」

21 印刷会社『(株)京町印刷』・全景

6階建ての鉄筋コンクリート製の社屋。

22 同・ミーティングルーム

聡志が来社している――向き合うように座っている『京町印刷』営業部社

員・立花圭吾(33)。

聡志、印刷してきたチラシのサンプルを見せて、

聡志「こちらが次回のチラシになります」

圭吾「いつもありがとうございます。(とサンプルを見ながら)相変わらず色使いがステキですね。『ユーミー』はこの辺りじゃ一番の地元密着型のスーパーマーケットでしょ。内容もですが、フォントや文字サイズも重要ですからね」

聡志「立花さんにそう言っていただけなんて、恐縮です」

圭吾「内容は問題ないと思います。一度、先

方にも確認取りますね」

聡志「よろしくお願いします」

圭吾「あ、新しいチラシ刷り上がったんです。

何枚か持ってきてきましようか？」

聡志「はい」

圭吾「ちよっとお待ちくださいね、すぐ持ってきてますから（と出ていく）」

聡志（N）「実際に印刷会社で刷られた現物は、作品実績として持って帰り、ファイルに綴じている。業務委託の都合で、自分が手掛けたことを公に告知することはできないものの中にはあったが、僕にとっては大事な作品であることに変わりはなかった」

と、スーパーマーケットのチラシを数枚持った圭吾が戻ってくると、

圭吾「お待たせしました。どうぞ」

聡志「（受け取って）ありがとうございます」

圭吾「ああ、今日はキャベツが安いみたいですよ」

聡志、チラシを広げて全体を見る――

セールの品の写真と金額がいくつも並んでおり、その中にキャベツの記載がある。

聡志「キャベツかぁ」

圭吾「（苦笑して）あれ、もしかしてまた何かパスタでも作るつもりですか？」

聡志「え……あ、すみません。どうも食料品を見ると、何を作ろうかと考えてしまっ

圭吾「もう立派な主夫ですね。奥さんが羨ましいな」

聡志「うち、小学校四年生の頃から五年間、父親が単身赴任で家を空けてて、母と妹と三人で暮らしている時期があっただですよ。親戚や近所の人とか、学校の先生たちからも、聞き飽きて洗脳されるぐらい『お父さんの代わりをしっかりとやらないとね』なんて言われて。母の手伝いをするうちに、気がついたら自分でも料理するようになってました」

圭吾「そういう人生経験って、思いがけない

ところで役立つことがあるんですよね」

聡志「そうなんですよ」

圭吾「あ、キャベツだったら、やっぱりペペ

ロンチーノとか良いんじゃないですか？

ほら、ファミレスでもあるじゃないですか。

にんにくの良い香りがして、僕は好きです

ね、あれ」

聡志「ああ、ペペロンチーノ……」

圭吾「良い感じのレシピ、思い浮かびまし

た？」

聡志「（前のめりになって）ありがとうございます

います。今晚は、ペペロンチーノにします」

圭吾「（驚いて）ぜひ……そうしてください」

聡志「（ハッと我に返って）あ、すみません

……」

気恥ずかしく頭を下げる聡志。

23 スーパーマーケット『ユーミー』・全景

(夕)

24 同・店内

買い物カートを引いている聡志。

聡志（M）「キャベツを使ったペペロンチーノを作るといいう大枠は決まったものの、何か他に具材はないだろうか」

25 マンション・長沢家・DK（回想）

冷蔵庫の野菜室を見ている聡志。

聡志（M）「今朝冷蔵庫の野菜室を見た時、ニンニクと鷹の爪があつたことは覚えてい
る」

26 スーパーマーケット『ユーミー』・店内

青果コーナーで、キャベツを手にする

聡志——周辺には、中年の婦人客が多
く来店している。

聡志（M）「夕方特売のタイミングを狙って
いるのか、この時間は主婦層が多い印象だ」
キャベツを吟味して、そのうちの一つ
を買い物かごに入れる聡志。

× × ×

精肉コーナーの前にやってくる聡志――
――ジュージュューと何かを焼く音が聞こえる。

聡志、音のするほうを振り向く――店員が、ホットプレートでウインナーを焼いている。

聡志、ホットプレートの上で焼かれているウインナーをじっと見つめる。

店員「おひとついかがですか？ あらびきで、

食感の良いウインナーですよ」

聡志、試食のウインナーを口にすする。

聡志（M）「これだ！」

× × ×

買い物かごの中に入っている、キャベツやウインナー、他にいくつかの食料品。

買い物カートを引いた聡志が、レジ前にやってくると、列ができています。

レジは、セミセルフレジ形式のものと

セルフレジ形式のものがある。

セミセルフレジで、客の買い物かごから商品を取り出して、バーコードスキャンをしているレジ担当・寺川千晴（24）。

千晴「五番のレジをお願いします」

聡志、客の列を見て、

聡志（M）「今日はセルフレジにしよう」

聡志、買い物カートを引いて、セルフレジの前にやってくる。

手慣れたように、鞆からエコバッグを取り出すと、自分で商品のバーコードをスキャンして、エコバッグの中に入れていく。

聡志（M）「いつでも買い物ができるように、エコバッグは常備している」

27 同・表（夜）

薄暗くなっている空。

エコバッグとビジネスバッグを両手に

持った聡志が出てくる。

聡志（M） 「唯は少し遅くなると言っていたから、今から帰ってゆっくりとペペロンチーノの支度でもしよう」

28 洋菓子店『ヴェール』・店内（夜）

厨房で浩一たちと一緒に、菓子作りに精を出している唯。

29 マンション・長沢家・DK（夜）

テーブルの上に置かれているエコバッグ。

30 同・同・聡志の仕事部屋

ジャケットをハンガーにかける聡志。
棚にしまっているクリアファイルを取り出すとデスクの上に置き、鞆の中から『ユーミー』のチラシを取り出すと、ファイルの中に綴じる。

聡志（M） 「このファイルが、作品で埋め尽

くされるのは、いつになるだろうか」

31 同・同・D K

エプロンを頭から被って、紐を結ぶ聡志——水道から水を出して、手を洗う。

聡志（M）「何度も洗濯をしてると、このエプロンの色落ちが酷い。まあ、無理もない。高校二年生の家庭科の授業で作って以来、もう十五年以上使っているエプロンだからだ。父が不在だったことも影響したのだろうか、家庭科の成績は何故か数学や理科といった主要教科よりもはるかに成績が良かった。裁縫の授業や調理実習等、僕のことをよく知っているクラスメイトたちは、何かと当てにすることが多かった」

32 高校・調理室（回想）

調理実習の最中。六人前後の班にそれぞれ分かれて『肉じゃが』を作っている——各班の中にいる聡志と唯。

唯「（聡志に向かって）ねえ、醤油ってどれぐらいだっけ？」

鍋に落とし蓋をしている聡志が振り向いて、

聡志「え？」

唯「肉じゃがに入れる醤油と砂糖って、どれぐらい？」

聡志「砂糖は大きじ一、醤油は大きじ三だけど、味見しながら調整しなよ」

唯「ありがとう」

33 マンション・長沢家・DK（現在）

聡志、冷蔵庫の野菜室から、ニンニクと、鷹の爪が入ったパックを取り出し、エコバッグからウインナーとキャベツを取り出す。

聡志（M）「あの時から使っているエプロンは、言わば高校時代の思い出のアイテムの一つでもあった」

聡志「さて、作りますか」

× × ×

以下、調理工程をカットバックで。
鍋に、水を入れて火にかける聡志。

聡志（N）「鍋に、水二リットルを入れて、
火にかける」

× × ×

ニンニクの皮を剥き、包丁でニンニク
を薄切りにする聡志。

聡志（N）「ニンニク二片は皮を剥き、薄切
りにする」

× × ×

ウインナーを袋から取り出し、斜め切
りにする聡志。

聡志（N）「ウインナーは六本使う。いつも
パスタの時は、斜め切りにする」

× × ×

キャベツの葉をちぎって、ざく切りに
する聡志。

聡志（N）「キャベツは、葉っぱを二枚ちぎ
ってざく切りにする」

× × ×

鍋の水が沸騰している——聡志、計量スプーンで塩を入れ、収納容器からパスタを取り出して茹で始める。

聡志（N）「ちょうど鍋の水が沸騰したので、小さじ四杯の塩を入れ、パスタ二百グラムを茹でる。茹で時間は七分である。この間に、具材を炒めていく」

× × ×

フライパンに、計量スプーンでオリーブオイル、ニンニク、一つまみの鷹の爪を入れて、火にかける聡志。

聡志（N）「オリーブオイル大さじ二杯、薄切りにしたニンニク、一つまみ取った鷹の爪を入れて中火にかける」

× × ×

フライパン内のニンニクが、フツフツする。

聡志、ウインナーを追加して、菜箸で炒める。

聡志（N）「ニンニクがフツフツしたら、斜め切りしたウインナーを入れて、火が通るまで炒める」

× × ×
レードルを持って、鍋からパスタの茹で汁をフライパンに注ぐ聡志。

聡志（N）「パスタを茹でている鍋から茹で汁を二杯、フライパンに注ぐ」

× × ×
冷蔵庫を開けて、鶏がらスープの素の容器とコンソメの素の容器を取り出す聡志。

× × ×
フライパンに、ざく切りにしたキャベツ、塩と胡椒とブラックペッパーを振り、計量スプーンで鶏がらスープの素とコンソメの素を入れて、菜箸で軽く混ぜる聡志。

聡志（N）「ざく切りにしたキャベツを入れ、塩、胡椒、ブラックペッパーを少々振り、

鶏からスープの素を大きじ一杯、コンソメの素を小さじ一杯入れ、軽く全体を混ぜ合わせる」

フライパンに蓋をする聡志。

聡志（N）「そして蓋をして、弱火にして二
分間煮込む」

× × ×

フライパンの蓋を開ける聡志。

聡志（N）「二分経つと、キャベツは火が通
って、しんなりとしていた。ちょうどパス
タも茹で上がった頃だ」

トングを使って、茹で上がったパスタ
をザルに入れて湯切りをし、フライパ
ンに入れる聡志。

聡志（N）「茹で上がったパスタを軽く湯切
りをして、フライパンの中に入れる」

× × ×

火を消して、フライパン内の具材を和
えるように混ぜる聡志。

聡志（N）「火を止めて、パスタが全体に絡

むように混ぜ合わせていく」

× × ×

食器棚から皿を二枚取り出す聡志――

その皿に、盛り付けていく。

粉末のパセリを振りかける。

聡志（N）「皿にそれぞれ盛り付け、最後に、

粉末のパセリを適量、上から振りかける」

34 完成した『ウインナーとキャベツのペペ

ロンチーノ』

聡志（N）「これで、『ウインナーとキャベツのペペロンチーノ』である。ウインナーの茶色、キャベツの葉の緑色、鷹の爪の赤色、ニンニクのクリーム色と、色彩のバランスも、自分の中では完璧な仕上がりである」

35 マンション・長沢家・DK（夜）

二枚の皿をテーブルへと運ぶ聡志――
そのまま椅子に座る。

聡志（M）「おそらく十五分もすれば、唯は
帰宅するだろうと予想していた」

聡志、スマホを取り出すと、料理の写
真を撮影する。

36 同・表

唯が帰宅する。

37 同・長沢家・玄関くDK

鍵を開けて、唯が入ってくる。

唯「ただいま」

ソファーに座ってテレビを見ていた聡
志が振り向いて、

聡志「おかえり」

唯「ああ、良い匂いする。お腹ペコペコだっ
たんだよね」

聡志「ちょうどさっき作ったところ。今日キ
ャベツが安売りしてたからさ、ウインナー
とキャベツのペロンチーノにした」

唯「パスタ食べたいって思ってたんだ」

聡志「何となく、そんな気がした」

唯「やっぱり、私たちってお互いに考えること分かってるんだね」

聡志「疲れたでしょ。お風呂も沸かしてあるから、これ食べたらずぐ入んなよ」

唯「うん、ありがと。あ、手洗って来るね」

聡志、立ち上がると台所へ向かい、箸とフォーク、お茶の支度をする。

唯、戻ってくると、

唯「よし、食べよ」

聡志「うん」

聡志と唯、テーブルを挟んで向かい合うようにして座る。

聡志・唯「いただきます」

聡志はフォーク、唯は箸で食べ始める。

唯「やっぱり聡志の作るパスタは美味しいわ」

聡志「今日『ユーミー』行ったらさ、試食コーナーでウインナー焼いてたんだよ。ちようどペロンチーノ作れるなあと思って。キャベツも特売日で安かったし」

唯「買い物上手だね、聡志は」

聡志、パスタを食べる唯を見つめる。

唯「どうしたの？」

聡志「いや……美味しそうに食べるなと思つて」

唯「だって美味しいんだもん」

聡志「唯は好き嫌いなくて、基本的に何でも食べるもんな、子どもの頃から」

唯「まあね。好き嫌いはずるなつて言われて育てられたから」

聡志「そういえば、給食の時もよく食べたし、高校の時なんて購買でいろんなパン食べてたっけ」

唯「うん。昔から、食べることには食欲だったから」

聡志「まあ、食べることが日々のエネルギー源みたいなもんだしね」

唯「そうだね」

聡志「今度はどんなパスタ作ろうかな」

唯「ねえ、今度の休みはさ、私がパスタ作る

うかな」

聡志「え？」

唯「私だって、たまには作らないとね」

聡志「けど、疲れてるんじゃないの？」

唯「平気だよ。息抜きだと思って、パスタ作
ってみる」

聡志「楽しみにしてる」

唯「うん」

聡志「次の休みってことは……（とカレンダー
ーを見て）あれ、いつになるんだ？」

唯「今は変則スケジュールだから、次の休み

は、来週の火曜日」

聡志「そっか。どんなパスタ作るんだろうね」

唯「気長に待ってて」

笑い合いながら、パスタを食べ続ける

聡志と唯。

つづく